



Title	懷徳堂関係研究文献提要（一）
Author(s)	
Citation	懷徳. 1983, 52, p. 93-95
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90618
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

善惡皆ソノ本分ニ止ル、是ハ顚蒙ノ益ナリ、上下皆顚蒙ナリ、
コノ顚蒙ヲ名ヅケテ神國ノ徳ト云傳ヘタルナルベシ、是モ亦顚
蒙ニコソ、

菅猪戸評曰、吾邦尙神其弊也、巫ト云テヨカルベシ、大抵股
ノ風ニ肖タル多シ、鬼神ニ崇ヒ事ヘテ禍福ヲ以テ其民ヲ恐
動スルハ符節ヲ合スガ如シ、モロ／＼ノ事鬼神ニ依トスル風
習ナレハ神國ト云シナルベシ、唯神ヲ尊ヒテ大切ニスルノ意
ナリ、神道ノ教ト云モノ有ニハ非

森列峯評曰昔佛法ノ入來リシト云ハ密法ナリ、密法ハ佛ノ穢
穢ニシテ舊ノ佛道ニ非ス、漢法ノ入來リシト云ハ刑名ナリ、
刑名ハ漢法ノ穢穢ニシテ儒道ニ非ス、コノ兩ノ穢穢ガ最初ニ
入タルヲ此ヲ儒也佛也トテ修施タリシハワガ國ノ顚蒙ナリ、
其穢穢ヲ捕ヘテ儒佛ヲ譏ハ神學者ノ顚蒙ナリ、佛ハマコトニ
譏テヨケレモ穢穢ヲ以テ譏ルハ肯綮ヲ失フ、マコトノ佛者ハ
是ヲ聞テ笑テ答ヘズ、儒者豈コレニ對辨センヤ、然ルニコノ
穢穢ヲ尊奉宗旨トスル浮屠多シ、穢穢ヲ主張スル儒者モア
リ、古ニイハザルヲ牽合附會シテコノ國ノ教ト云モノヲ建
立シタル神學者モアリ、世ハサマ／＼ニコソ、抑穢穢ニモア
レ漢法ヲ傳ヘテ一旦國俗ヲ改タルハヨシ、此ニテソノ前ノ顚
蒙ニシテ文理ナキ姿ヲ知ベシ、此ハ制度文物ニテ云ナリ、サ
テ經傳及諸書籍次第ニ入來レリ、此ヲ讀習ヒヌレバ仁義忠信
ノ教ハ自ラ人ノ心ニ染ベシ、コノ益ハ又廣大ナリ、ソノカミ
マコト三代ノ禮樂文章ノ入來リナバイカバカリ殊勝ナルベキ
ヤト是ノミ殘多ク思ハル、。

〈懷徳堂關係研究文獻提要(一)〉

(1) 論文…松崎 寿「中井竹山ノ草茅危言ニ於ケル
經濟學說」(神戸經濟大學「現神戸大學」經濟學
部・『國民經濟雜誌』5・5・明治四十一年)

この論文は、松平定信に提出した中井竹山の意見書をまとめた
「草茅危言」の中から、対外商政および物価についての竹山
の独自の考えを考察している。

まず対外商政の面について言えば、中井竹山は当時の貿易で
問題となった大量の金銀流出にふれ、通説に反して、金銀流出
は惜しむべきことではないが、日常不可欠の資材である銅鉄に
対してはその海外流出を深く惜しんでいる。ここから、竹山は
外国貿易を有害無益のものと考えた。だが外国貿易は絶対に禁
止すべきだという極論を主張するまでには至らない。そこで、
銅鉄に代わる輸出品として美濃紙・墨・陶器・人形など各地の
特産品をあげている。わけでも第一級の輸出品として勧めてい
るのは、日本で翻刻された『孝経』・『四書』・『五經』・『國語』・
『史記』・『漢書』などの書物である。

しかし竹山は、あまり外国貿易が活発化することを喜ばず、
内地産でまかなえるものならばその外国品は輸入禁止すべきだ
と主張する。ここに竹山の保護貿易的な考えを見ることができ
る。

ついで物価の面について、竹山は当時のインフレの原因を考

える。すなわち、金銀貨幣の改悪による質の低下・株仲間による市場独占・株仲間に対する重税の三点がインフレの原因であるとする。ではその解決策はと言えば、金銀貨幣の品質の回復・株仲間の廃止・財政節約による諸税の免除を行なうことであるとする。

以上のように竹山の経済学説は、当時の実情に沿ってなされたものであるから、決して看過すべきものではないと論述している。

(滝野邦雄)

(2)論文：平 重道「懷德堂の經学思想」(東北帝国大学「現東北大学」・『文化』六卷12号・昭和十四年)

この論文は、懷德堂にかかわった五井蘭州・中井竹山・中井履軒が儒学についてどのような考えを持っていたかを考察することによって、懷德堂の学問の特色を明らかにしようとしている。

五井蘭州は朱子学の絶対性を主張したが、その一方で、儒教經典に対する朱子学の註解の不備を指摘した。そこから經典解釈に関する限り、朱子学によらないで經典の原意を求めるべきだとの主張がおぼろげながらも自覚されたと言いうことが出来る。

中井竹山はこの主張を受けつぎ、朱子学と經典解釈とを明瞭に区別した。朱子学の根本思想さえ離脱しなければ、經典の本

旨を明らかにすることは価値あることとしてとらえられた。しかし竹山のこうした考えも、懷德堂での教務多忙のため理論にのみとどまってしまった。この主張の実現は、弟の履軒を待たねばならなかった。

中井履軒は竹山の理論の実現のため、もっぱら經書の註釈に精力をそそいだ。その成果が『七経逢原』・『七経影題』・『七経影題略』である。そこから履軒独自の考えを見ると、履軒の儒学研究の目的は、孔子・孟子の本来の立場を明らかにすることであり、そのためには朱子学の説であっても合致しないものは排除しようとした。そしてこの考えの徹底化は經典本来の意味と、朱子学との間に矛盾を生じさせることになり、最終的には朱子学そのものを後世の附会として排除するに到ることを意味する。履軒の思想は、こうした朱子学否定にまで発展しかねない面を有しながらも、しかしやはり朱子学に留まっていたのである。何故なら懷德堂が官許学問所の名目を有していたため、朱子学を教学の中心にすえる必要があったためである。

ではこうした考えに導かれた懷德堂の儒学思想は近世儒学思想史上どのような意義を有したのであろうか。元来、懷德堂の精神は自由研究を旨としており、真理探求の学問を樹立すべき純粹な性質を含んでいた。だが官許学問所の性質上、朱子学を中心としなければならなかった。そのため懷德堂の思想は、經典研究では古義を求めながらも、理論の面では朱子学の思想を借り、両者を折衷したものであると言えよう。しかも懷德堂のこの折衷の特色は曖昧な混合に終らず、經典解釈にあたっては、原義把握を徹底させて考証学にまで接近させた点にある。

懷徳堂では以上のべてきたように、思想と經典研究は、分立論のたてまえから宋学に統一されて主張され続けた。これが懷徳堂の特異性である。懷徳堂はこうした性質を有しながら、考証学への道を指示していったと言えるであろう。(滝野邦雄)

(3) 論文・大月 明「中井甕庵論」(大阪市立大学『人文研究』・10ノ10・昭和三十四年)

本書は日本近世儒学史上における懷徳堂の役割を再評価する一環として、創設期の功勞者、中井甕庵の学問・思想を論じたものである。

中井甕庵にはまとまった著述が少なく、そこから体系的に彼の思想を浮彫にすることは困難である。そのため彼の長男、中井竹山が記した「先君子貽範先生行状」を主とした資料としてつづ、甕庵の思想の概観をおさえる必要がある。

それによれば、甕庵の立場は朱子学を中心とし、孝弟忠信、特に孝弟の徳目を押した誠の強調である。しかしこれらのことは儒学を講ずる者にとっては当然のことである。重要なことは、この時期に孝・誠を強調することの歴史的意味であり、その強調が社会的にどのように機能したかということである。

甕庵の生きた享保期は、政治的には幕藩体制の解体が始まり、社会的には孝の倫理を支えていた家の世襲の觀念が維持されなくなりつつはあったが、子の親への絶対的服従という孝の意識の要請はまだ強かった時期である。また甕庵がその教育の

対象としたのは懷徳堂に集まる多くの町人であり、彼らは主人に対する奉公人の孝的な服従を期待していた。

このような状況のもとで甕庵は『五孝子伝』など通俗的な教訓書を著わし、多くの人々に伝達しようとした。甕庵の思想史的意味はこの点にあり、彼の思想が竹山・履軒兄弟という名儒に受け継がれ、懷徳堂の中に生き続けたことがより大きな意味をもたせることになるのである。

なおこの論文には補訂(『人文研究』11ノ9・昭和三十五年)(金藤行雄)がある。